平和体験学習で学んだこと

北中学校一年　上江洲　由貴

この夏休み、僕は市の平和体験学習で広島を訪問しました。平和記念資料館では、黒こげになった三輪車や溶けてゆがんでしまったガラスびん、八時十五分で止まった時計、ボロボロになった中学生の制服などの展示物を見ました。また、鉄骨がむき出しになっていて、そこだけ時間が止まっているかのような原爆ドームを見て、原爆がどれほど恐ろしいものであるかを感じました。体験学習で僕が一番心に残ったのは、被爆体験者による講話でした。話を聞いて、原爆は一瞬で罪のない大勢の人々の命をうばったり、建物を焼き尽くしたりするだけではないと知りました。生き残った人にもたくさんの苦しみを与え続けるものでもあると知ったのです。

話をしてくれた浅野さんは、原爆が投下された日、学校を休んでお母さんの家にいたので助かったそうです。翌日学校へもどると、

20 × 20

そこは遺体収容所となっており、グラウンドには死体が海苔巻きのように毛布で巻かれていたのを見たそうです。

浅野さんは、「生き残っているほうが辛い。あの日みんなと一緒に死んでいたら、その後の焼け野原や多くの人が死んでいく様子を見なくて済んだ。」と言っていました。それほど広島の様子は悲惨だったのだろうと考えると、僕は心がとても苦しくなりました。

今回僕は、原爆の恐ろしさと生き残った人の苦しみについて学ぶことができました。あの日から七十三年が経ち、被爆体験者から話を聞く機会は減っています。二度と浅野さんのような思いをする人がないように、僕は広島で見聞きしたことを忘れずに記憶し、たくさんの人に伝えていきたいと思いました。

20 × 20